

教 仏 庵 草

第 213 号
(発行日)

2008年3月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒 6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月 22 日 午後 2 時

○ 〈念仏座談会〉

毎月 2 日 および 12 日

午後 3 時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月 2 日 と

12 日。午後 7 時より。

* 8 月 22 日 同朋の会 および 8

月 12 日 念仏座談会は休みます

無相さんの求法に思う

今年、木村無相さんの二十
五回忌にあたる。無相さんは
生涯、独身で求道聞法一筋に生
きた人である。幼い頃、親の
仕事の都合で、満州に渡った
が、十四才の時、親元を飛び
出して平壤（今の北朝鮮）に
行き、十七歳頃日本に戻って
きた。二十歳の頃、ふっと眼
が自分の内面に向き、親に対
する怨みや憎しみなどのあさ
ましい煩惱におどろき、なん
とかして悟りが開きたい煩惱
を無くしたいと思うようにな
った。それが求道の始まりで、
それ以後、暗中摸索していた
が二十九歳の時、四国の遍路
に出、それが縁で高野山で真
言宗の修行をするようにな
った。しかし、悟ることも出
来ず年月だけが虚しく過ぎて
いった。五十七歳の時、とう
とう自分もう自力の修行は
ダメだ、真宗一本を求めよう
と決心し、東本願寺の門衛を
しながら真宗の聞法に励む。
そして六十歳半ばに「弥陀の
本願に順じてただ念仏する一
道こそが我が道である」と、

お念仏を称える一つの道にお
いて、お念仏のいわれを聞き
つけていくようになった。や
がて七十五歳を過ぎて、我執
我愛の固まりの我が身と知
り、「ただ称えよ」という大
慈大悲の仏心を深く信受され
た。そして八十歳で往生され
たのである。

こうした木村無相さんの生
涯を思うと、無相さんという
方は大変失礼な言い方かも知
れないけれど、昔の名だたる
妙好人のような宗教的素質の
勝れた方ではなくてむしろ鈍
根の方だったと思う。

真宗のお話を聞いて、速や
かに信心をいただく人があ
る。又、ろくろく念仏を申す
こともなく、真宗信心に入る
人もある。これみな宗教的に
は利根の低いいわば宗教的素質
の豊かな方であろう。

そういう人に比すれば無相
さんは宗教的素質は乏しく、
むしろ鈍根だったと私は思
う。だから、二十歳に求道心
を起こしながら、やっと五十

七歳で真宗
ばかりを聴
くようにな
り、さらに
六十歳半ば
で念仏一つになられた。そし
て七十五歳を過ぎて、念仏の
信心が徹底したのである。

無相さんを真宗に入れしめ、
さらに念仏一つにならしめ、
ついに信心の念仏行者になら
しめるというプロセス。それ
はまさに、どんなに愚鈍な者
であろうとも救わずにはおか
ないとの願を起こして修行成
就して阿弥陀仏となり、一切
衆生が助かる道を敷きたもう
た阿弥陀仏のおてだてなので
あろう。

阿弥陀仏の大悲の方便は、
さまざまに行いによって浄土
（救い）を求めさせ（十九願）、
そしてさらに念仏一つを称え
る道に入らしめて念仏のいわ
れを聞かせ（二十願）、つい
に念仏の信心に帰入せしめめ
たもう（十八願）。それは利
根よりも鈍根、宗教的素質あ
るよりも無い者をこそ目当て
に救いたいという阿弥陀仏の
大悲から用意し与えてくださ
った道ではなからうか。
勝れた素質や宿善の厚い人

は念仏がなくても、法話を聞
くだけで信心が得られよう。
しかし、私もし鈍根なれ
ば、このような利根の人の真
似をしても、いつまでたつて
も信心は得られないのではな
いか。

そういう鈍根の者の助かる
道はすでに阿弥陀仏が、念仏
を与えて、称えさせ、聞かせ
て、信じさせるといって、愚鈍
の者への道を用意してくださ
っていたのであり、この道を
歩み、ついに阿弥陀仏の大悲
に摂取されることを、実地に
証明されたのが木村無相さん
だったと思う。

ただ、無相さんは鈍根だっ
たかもしれないが二十歳の頃
から、一貫して「何とか悟り
が開きたい、救われたい、真
実にであいたい」という志を
捨てなかつた。その志は途中
で弱まりもし、懈怠にもなつ
たであろう。しかし、この志
を持ち続けたのである。そし
て、それが念仏にであって花
が咲いたのである。それゆえ、
香樹院師は「これ一つ聞きつ
けずばおくまいの心がゆるん
だら、仏になる種を失うたと
思え」と厳しく仰せられてい
る。

正信偈に学ぶ問答

(一一)

法蔵菩薩因位時
在世自在王仏所
親見諸仏浄土因
国土人天之善惡
建立無上殊勝願
超発希有大弘誓

(書き下し)
法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、諸仏の浄土の因、国土人天の善惡を親見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。

(現代語訳)
法蔵菩薩の因位のとときに、世自在王仏のみもとで、仏がたの浄土の成り立ちや、その国土や人間や神々の善し悪しをご覧になって、この上なくすぐれた願をおたてになり、世にもまれな大いなる誓いをおこされた。

D 「これからは正信偈の最初の帰命無量寿如来・南無不可思議光という名号のいわれい

か」

D 「仏法の深い真実(無分別智の世界)をそのままストレートに説いても――例えば般若心経のように――愚かな

私たちには身について了解することは極めて困難です。分別的知性しかない凡夫には

「これがこうしてこうなった」という因果の形、いわゆる「いわれ」でしか、如来大悲の心にふれることができないからではないでしょうか。東本願寺の建物でも、現在の建物だけを見ているとただ大きなあというだけです。それがどのようにして建てられたかのいわれを聞くと、そこ

に先人の深い志や願いやご苦労が知られてきます。たとえ

ば、大師堂と阿弥陀堂の間の廊下に毛綱が陳列されています。あれは明治時代にお堂を建てる際、普通の綱では大きな材木を引き上げても切れて

しまう。それでご門徒の多くの女性が自らの髪を切って、大きな綱にあんで毛綱が何本も作られて、その毛綱で巨木

をつり上げて工事を完成することが出来たという話があります。当時の女性にとって黒髪は非常に貴重なものでした

が本願寺再建のために髪を切つてまで再建に捧げたのです。それは本願寺を建てるための先人の願いの深さを示す一例ですが、そういう話を聞くことによつて本願寺の建物がただ単に大きいというだけでなく、ご門徒の信仰心の厚さやご苦労の結晶であるという

り、本願寺の建物のできたいわれを聞くことによつて仏法のお徳の尊さを建物を通して感じることもできるようなもの

です」

A 「そういえば小さい頃、冬学校に行くとき毛糸の手袋をはめて行きましたが、その手袋は母親が手作りで作ってくれたものでした。店で買ったものとは違い母の愛情がその手袋を通して伝わってきました。その手袋の出来た因縁を知ることによつて母親の愛情を感じることも出来るのですね」

D 「そうですね。たとえ身近な物でも、その物がどういう因縁でできたのかを知らなければその物の価値がなかなか私たちには分からないものです。今、南無阿弥陀仏とお念仏を申す、その南無阿弥陀仏はどのようにしてでき、何のためにでき、誰のためにできたのかという、深い深い因縁(いわれ)を聞くことによつて、南無阿弥陀仏の有難さを知り、広大な仏様の慈悲を感じることも出来るのです」

A 「南無阿弥陀仏のいわれを聞くことによつて、阿弥陀仏の大慈大悲のお心を知るので

すね」

D 「ええそうです。そしてまた、南無阿弥陀仏のいわれを聞くことは同時に人間(衆生)の罪障の深さを知ることでもあります。南無阿弥陀仏が成就されねば私たちが救われな

いという、そんな私たちの有様が知られます」

A 「すると法蔵菩薩のお話は現実にあつた事柄ではないのですね」

D 「法蔵菩薩の説話は、世界の歴史的な事象を語るのとは違います。たとえば秦の始皇帝が紀元前二百二十一年に古代中国を統一し、万里の長城を築いていったとか、一六〇〇年関ヶ原の戦いで家康が勝つて日本の支配者になったとか、そういう歴史的な史実のように、法蔵菩薩という方が世界の歴史の中に出現して行動し自分の願いを実現したというのではありません」

*

雑記帳

人間の肉体の組織や機能の研究や細胞の働き、さらに脳のニューロンシステムの研究は進んでいるが、しかし、人間にとって一番身近な心はこうした場合の科学的手法によって分かるのであろうか。私が今何を考え、どう感じ、何を意欲しているか、ということは科学的な観察や計測によってほとんど分からないのではなからうか。脳に電極をあて、脳内の部位を観測し、電子顕微鏡で見ても、ほとんど分からないのではないか。ただ、たとえば怒りのために感情と関係がある脳の部位で電気的反応や化学的な変化が起こっているとか、興奮しているというようなことは分かるであろう。しかしその怒りの内容を脳を調べることによってありと分かるというようなことはあるまい。せいぜい脳システムのいろいろなデータを集めて、それと比較し類推して、この人は今、怒りの感情と関係する脳組織の部位がどのように興奮しているから、怒っているであろうと判断するまでではなからうか。それは例えば、すでに怒っている人の脳内の神経系統をいろいろ調べて作る多くのデータを参考に、似たような脳の反応から類推しているのだから、その人自身の脳を調べて、人それぞれに起こる怒りの感情の微妙な内容

が知れるのではあるまい。しかもこれを科学者の「心」で推測しているのだから、観測機器が直接示すのではない。ペルクソンは、脳内現象を科学的に観測して心の内容を分かつようとするのは、たとえて言うと、オーケストラの指揮者の指揮棒の振りを見てその音楽の内容を知ろうとするようなものだという意味のことを言っている。指揮棒の振り方の大小や速度の遅速でその音楽のリズムとか音の強弱とかは多少類推できても、その音楽の内容はほとんど分からない。自然科学は物質の領域を研究する学であって、心の内容や本質は、自然科学によってただけ物質的な脳システムを観察し分析し研究しても、ほとんど分からないと思う。

それに対して、人間の心の本質や内容は厳しい瞑想修行によって開かれる智慧によって知られてくるという伝統がインドに非常に発達し、その伝統の中にブッダは誕生した。ブッダは厳しい禅定修行による悟り経験によって心の真相を知り、それを説かれた。悟りと悟りへの道、縁起や業因果、煩惱や生死流転などを説かれたのである。心は、外なる物としての脳を観察して知れるものではなくて、直接に直観的な智慧によって知られるものである。しかも、物質は物質自身を知ることとはできない。物質自体が心によってしか知られない。そういう意味では物質は間接的にしか知られないが、心は直接的に知り得るともいえよう。

D 「そうです。私を救うてくださるまこととして何度も聞かせていただくのです。聖人は、聞法の「聞」について、

聞と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞き疑心あることなし。これを聞と曰うなり。（信巻）

と仰せられています。仏願の生起・本末とは、法蔵菩薩の発願と思惟・修行とその成就、さらに衆生に回向して、今南無阿彌陀仏として与えられ聞かされる。この南無阿彌陀仏のいわれが端的に「助かる」の仰せとなり、それを疑いなく聞き受けているのが信心なのです。法蔵菩薩の願行は非常に大切な処ですから、聖人は正信偈に、帰敬偈のあとすぐに法蔵菩薩因位時と讚歎を始められるのです。法蔵菩薩を生きたまこととして南無阿彌陀仏に感じておられたのだと思います」

(了)



芥子殻 2
(C)SHOGAKUKAN INC.

遍的な大悲のまことであることを感じることができるとすね」

D 「そうですね。そして一度南無阿彌陀仏のいわれを聞いて、仏心大悲にふれるなら、この法蔵菩薩の説話が単なる説話や物語ではなくて、如来大悲のまことそのものとして実感されてきましよう。私を救うてくださる底知れない不可思議な大悲の真実として、歴史的な現実以上の今この現実性として感じられてくるでしょう。この世の日々のニュースに報道される事象や事件は、その時々は大変リアルなものとして感じますが、時が経過して行くなかで、夢のように、幻のように過ぎ去っていきますね。そういう歴史的な事実をいくらくさん知っても自己存在を全体的に救うことはできません。そして逆に、今まで夢のようにしか思えなかつた法蔵菩薩の物語こそ、信心においては万人を救う永遠の真実であると知られてくるのです」

A 「そうすると法蔵菩薩の物語をよくよく聞かせていただくことが大事なことです」

A 「法蔵菩薩の物語が歴史的な事実を語るのではないとしたら、それは単なるおとぎ話とか神話と同じなのですか」

D 「おとぎ話とか神話には大事な教訓や訓戒やあるいは人間の心の機微や世界の不思議さなどを表現するものが主です。しかし法蔵菩薩の説話は、この世を越えてこの世に働き続けている普遍的な真実そのものを、人間に知らせ受け取らせるために、釈尊が説かれたものです。先ほども申しましたが、人間は「だれが、どこで、なにをして、どうなった」という因果形式で考え、分かるようにするそういう存在ですから、真実そのものを原因と結果という形式で表現して、その真実にあずからしめたいと、説かれたのが法蔵菩薩の物語ではないでしょうか。ですから、それは単なる歴史的な事件を記述したものでなければ、単なる空想的なおとぎ話でもない。万人に常に働き続けているこの上ない真実そのものを私たちに表わし示し与えようとされるものといつていいのでしょうか」

A 「法蔵菩薩の説話を通して私たちは、南無阿彌陀仏は普

信心夜話

《松並松五郎念仏語録を読む》 1

太字は松並さんの言葉。

*

○息子はテレビを買った。そえ物としてケース付きの「ニハトリ」で、雄は口を開いている。雌は口を閉じている。雌は口を閉じている。それに讚を書いた。

「この鳥は 口ありながら なぜ啼かぬ」

雄は念仏している。雌は余計なこと言うな、念仏聞け、と。どちらも私への御意見。どちらも念仏している、聞いている事です。

(人形の雄の鳥は口を開けている。これは念仏申せと云う教えであり、雌は口を閉じている。なぜ口を閉じているか。その念仏を直接に聞け、素直に聞けとのお勧めの姿だと感じられたのである。いろいろな事物の上に仏法を味わっておられる。念仏しつつその念仏を聞く。自らの口に現れたもう南無阿弥陀仏を軽く聞いている私である)

*

○岐阜へ詣らせて頂きました。御縁が終つて或る師、「あなた、信心は如何ですか」と、「私、信心はありません。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」。師は「あなたの信は盲信です」。「それではあなた様は解信ですか」 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

(本願を信じるのは、仰せのままに実に単純に受け入れている外にないから、外から見れば盲信に思われよう。しかし、本願を不思議と信ずるのは、広大な大悲心が私に届いて、はじめて不思議にも信じられる。たまわる信心という外はない。盲信といわれて、いいえ違いますといつても、この不思議は理解されないから、松並さんも、そのことには何とも云われずに、それではあなたは解信ではないかと反省をうながされたのであろうか。凡心のおこす信心は解信か盲信か、どちらかであつて、どちらも縁あればすぐ壊れる。解信は知性で納得した上での信心、納得できなくなったらすぐに動揺する。単なる盲信は思い込みでしかないから、根のない幻想をまぬがれないし、時には狂信的にもなる)

○どうもすっぱりいかぬと言うお方に、すっぱりいかぬ人に聞いては、いつまでもすっぱりいかぬ。すっぱり念仏に入つたお方につかねば、すっぱりいかぬ。

*

(お念仏をいただいた人のお話は大悲の感情が伝わってきて、有難い。松並さんは時々涙ながらに大悲を語られた。念仏を実感的にいただかず、念仏の講釈や真宗の知的解釈だけのお話は冷ややかで大悲が伝わってこない)

*

○念仏者は、「わけ」が判らぬまま念仏して居ても終りには、辻褄が合う。法義者は道理が判つても終りには、辻褄が合わぬ、わからなくなる。

ぬ、わからなくなる。

(わからぬままにお念仏に親しんでいると、お念仏の中に不可思議な大悲がこもっているゆえ、ついには助かる道理がわからぬままでお助けの慈悲にあう。お念仏申さずにお助けの道理だけが分かつて、胸の内に道理や理屈を超えた大悲がとどかなければ勘定はあうが一文無しと同じ。お念仏を聞くことより道理理屈を知りたがる私へのお叱り)

*

○東向きに(地獄行き)に歩いているまま、西に引きずられてゆく。東向きの私が西向きに変わるのでなく、一代東向きのまま、前になり後になって、南無阿弥陀仏にひきずられる。 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

・仏は、名なり、声なり、御体なり、御血潮なり。南無阿弥陀仏は、大悲招喚の呼声であります。南無阿弥陀仏の中に今、現にいだかれて生かされています。私がいるので南無阿弥陀仏に成りきつて下されました。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

この活仏、声の仏ましましてこそ、かかる身が護られいだかれて、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 いかされています。

(どこまでもこの世が好きで浄土を願わない東向きの私を、南無阿弥陀仏様の方がここまですべて南無阿弥陀仏と逃げる私をつかんで、ひきずってまでして西すなわち浄土へ連れて行ってくださる。仏法

者や信心者になれない無信、無仏法の私

を。

弥陀は声にまで成って、撰取の大悲を知らせてくださる。仏心大悲に抱かれて、いることが仏に生かされていることだと、お知らせくださる。単に肉体が生かされていることを喜ぶというのではない)

(了)

《お休みのお知らせ》

4月12日(土)

念仏座談会と共学会は休みます。

《春季彼岸永代経法要》

3月22日(土)

午後二時始まり

念佛寺にて